

2015年度 学位申請論文

古代語複合動詞の研究

文学研究科日本文学専攻
徳 本 文

目 次

序章 研究の目的と方法	1
一 研究の目的	1
二 研究の対象と方法	2
第一章 複合動詞の定義と問題点	4
第一節 複合動詞の定義	4
一 複合語	4
二 複合動詞	5
第二節 複合動詞の問題点	6
一 一語の認定と複合動詞の成立	6
二 複合動詞後項と補助動詞	8
三 複合動詞前項と接頭辞	10
第二章 動詞連用形+動詞型複合動詞の構造と分類	12
第一節 現代語複合動詞の分類	12
第二節 古典語複合動詞の分類	14
一 関(一九七七)による分類	14
二 山王丸(一九九四、一九九六)による分類	15
第三節 筆者による分類	16
一 分類の対象	17
二 分類の項目と基準	18
三 形式化の基準	18
四 分類の実例	19
五 複合動詞の範囲	22
第三章 古代語複合動詞の概要と変遷	24
第一節 概要	24
一 分類結果	24
二 上代における複合動詞	24
二・一 『万葉集』・記紀歌謡	24
二・二 宣命	29
三 平安時代の複合動詞	31

三・一	『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』	3 1
三・二	三代集	3 1
三・三	『源氏物語』	3 2
第二節	前項・後項の間に助詞が入った例について	3 4
一	分類結果	3 5
二	『源氏物語』以前の例	3 6
三	『源氏物語』の例	3 8
第三節	前項・後項の順序について	4 0
一	『万葉集』の例	4 0
一・一	意味の違いが明確なもの	4 1
一・二	意味の違いがあると考えられるもの	4 1
一・三	使い分けが未分化なもの	4 3
一・四	表す内容に違いがないもの	4 4
二	『源氏物語』の例	4 5
第四節	接頭辞的前項動詞について	4 7
一	古代語における接頭辞的前項動詞の概要	4 8
二	前項動詞の形式化～『万葉集』の例を中心に	4 9
二・一	前項＝他動詞＋後項＝自動詞の場合	4 9
二・二	前項＝他動詞＋後項＝他動詞の場合	5 0
二・三	前項＝自動詞の場合	5 1
三	平安時代の接頭辞的前項動詞	5 4
第五節	転義した語	5 9
一	古代語で転義の見られる複合動詞	5 9
二	各語の用例と意味	6 0
二・一	動作・行為を表すもの	6 0
二・二	副詞的に用いられたもの	6 4
二・三	転義と複合動詞の成立について	6 8
第四章	修飾関係の複合動詞	7 1
第一節	概要	7 1
一	前項が後項を修飾・限定するもの	7 1
一・一	後項が前項の結果を表す(原因・理由・手段・方法)	7 1
一・二	前項が後項の様態・状況を表す	7 2
一・三	思考・発言の内容	7 4
二	後項が前項に意味を付加するもの	7 5

二・一	後項が前項に様態を付加するもの	75
二・二	後項が前項に方向を付加するもの	75
第二節	前項と後項の目的語の不一致について	77
一	上代における目的語の不一致の例	79
一・一	自動詞+他動詞	79
一・二	他動詞+他動詞	80
二	平安時代の資料における例	81
二・一	自動詞+他動詞	81
二・二	他動詞+他動詞	82
三	複合動詞の成立と修飾関係の複合動詞	83
第三節	前項を否定する後項について	86
一	～残る・～残す	87
一・一	～残る	87
一・二	～残す	88
二	言ひ消つ・言ひ隠す	89
三	書き落とす・書き漏らす	90
四	見捨つ・見放つ	90
四・一	見捨つ	91
四・二	見放つ	92
第四節	修飾関係の後項動詞「いづ」	93
一	「いづ」の辞書記述と先行研究	94
一・一	辞書記述	94
一・二	先行研究	95
二	自動詞として使われた後項動詞「いづ」	96
三	他動詞的に使われた後項動詞「いづ」	97
三・一	「～いづ」と「～いだす」	98
三・一・一	使い分けが明確な例	98
三・一・二	意味の違いが明確でない例	99
第五章	補助動詞的用法の後項動詞	104
第一節	古代語における補助動詞的用法の後項動詞の概要	104
第二節	可能(不可能)・困難	106
一	辞書記述	106
二	前項動詞	107
三	意味・用法と変遷	110

四 「あまる」	114
第三節 程度・強調	115
一 前項動詞の内容のはなはだしさ	115
二 前項動詞の動作の対象・範囲に関するもの	121
三 程度の変化を表すもの	125
第四節 動作の方向・対象	127
第五節 意図・心情・態度	129
第六節 補助動詞的後項動詞「あふ」「かはす」と接頭辞的前項動詞「あふ(あひ)」について	132
一 古代語における後項動詞「あふ」の形式化と意味	133
一・一 「～あふ」の数量的変遷と形式化	133
一・二 複数主体の同一動作を表す「～あふ」	136
一・三 際会を表す「あふ」	137
一・四 『源氏物語』以降～鎌倉時代初期の「～あふ」	138
二 後項動詞「かはす」について	139
二・一 「～かはす」の数量的変遷と形式化	139
二・二 補助動詞的用法の後項動詞「かはす」の用法	141
二・三 「～かふ(下二段)」	142
三 前項動詞「あふ」の意味と変遷	143
第七節 「いる(四段)」「いづ」について	147
一 「いる(四段)」について	147
一・一 「いる(四段)」の辞書記述と先行研究	147
一・二 後項動詞「いる(四段)」の形式化	148
一・三 転換・推移を表す「～いる」	149
一・四 程度を表す「いる(四段)」	150
二 補助動詞的用法の「いづ」について	151
第六章 後項動詞の補助動詞的用法 ～アスペクトに関わる補助動詞的後項動詞	155
第一節 アスペクトに関わる補助動詞的用法の後項動詞の概要	155
一 概要	155
二 開始	157
三 継続	157
四 反復	159
五 中止・中断	161
六 終了・完了	161

七 効力・影響の残存	163
第二節 「～そむ」「～はじむ」	164
一 「～そむ」「～はじむ」の意味～辞書記述と先行論文から	164
二 古代語「～そむ」「～はじむ」の概要	165
三 上代の「～そむ」「～はじむ」	168
四 平安時代の「～そむ」「～はじむ」	170
四・一 継続・進行する一回の動作の開始	170
四・二 状態（変化の結果）の継続	172
四・三 反復される動作の初回	172
四・四 複数主体によって反復される動作の初回	173
四・五 継続・反復が認められない例	174
四・五・一 「～そむ」	174
四・五・二 「～はじむ」	175
五 まとめ	175
第三節 「～ある」「～をり」	176
一 「ある」「をり」の辞書記述と先行研究	177
二 後項動詞「ある」「をり」の変遷	179
三 上代(万葉・記紀)の「ある」「をり」	180
三・一 前項動詞	180
三・二 「～ある」の用例と考察	180
三・三 同じ前項をとる「ある」「をり」	180
三・四 動作動詞・情態動詞を前項とする「をり」	182
四 『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』と三代集における「～ある」「～をり」	184
五 『源氏物語』の「～ある」「～をり」	185
五・一 「ある」の前項動詞の多様化	185
五・二 変化動詞+ある	186
五・三 「情態動詞+ある」と「主体動作動詞+ある」	186
五・四 「～をり」	187
六 敬語動詞	188
七 まとめ	190
第四節 「～わたる」「～つづく（下二段）」	191
一 先行研究	191
二 動詞「わたる」「つづく（下二段）」の意味と複合動詞「～わたる」	
「～つづく（下二段）」の分類	192
二・一 辞書記述	192

二・二	分類結果	193
二・三	考察から除外する「～わたる」「～つづく(下二段)」	195
三	『源氏物語』における「～わたる」と「～つづく(下二段)」	196
三・一	前項動詞	196
三・二	「言ふ」「思ふ」を前項とするもの	196
三・二・一	「言ひわたる」と「言ひつづく」	197
三・二・二	「思ひわたる」と「思ひつづく」	198
三・三	「言ふ」「思ふ」以外を前項とするもの	200
四	『源氏物語』以外の資料における「～わたる」「～つづく(下二段)」	201
四・一	上代の用例	201
四・二	『源氏物語』以前の平安時代の「～わたる」「～つづく(下二段)」	203
四・二・一	『源氏物語』と類似の意味・用法	203
四・二・二	『源氏物語』と相違のある例	204
四・二・三	『源氏物語』と相違のある用例～『源氏物語』以降	205
五	まとめ	205
第五節	「おく」について	206
一	現代語「～ておく」の意味	207
二	古代語の動詞「おく」の意味と分類	208
二・一	辞書記述	208
二・二	古代語における「～おく」の意味分類	209
三	本動詞の意味を保持している後項動詞「おく」	210
四	補助動詞的用法の後項動詞「おく」	213
四・一	「おく」の形式化と前項動詞	213
四・二	「思ひおく」と「聞きおく」について	214
四・二・一	「思ひおく」	215
四・二・二	「聞きおく」	216
四・三	意図性のない「～おく」	217
四・四	意図性のある「～おく」	218
五	まとめ	219
終章	まとめと今後の課題	222
	テキストと参考文献	225

論文要約

序章 研究の目的と方法

近年、様々な観点から複合動詞に関する研究が進められているが、複合動詞の歴史的変遷には不明点が多い。本研究では、上代から中古の和語資料本文から「動詞連用形+動詞」をすべて抜き出して分類し、その語構成を探ることによって古代における複合動詞の成立・変遷と意味・用法について考察する。

調査対象とした資料は『万葉集』『記紀歌謡』『続日本紀宣命』『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『源氏物語』で、必要に応じてオンラインデータベースも使用した。

第一章 複合動詞の定義と問題点

古代語の複合動詞の成立・存否については様々な議論があり、アクセントの観点から中古において複合動詞は二語として認識されていたとした金田一（1953）をはじめとして、「古代語において複合動詞は成立していなかった」とする説も多い。また、古代語に複合動詞の存在を認める立場でも、どこまでを複合動詞とするか等問題が残り、定義自体に揺れが見られる。加えて、複合動詞後項と補助動詞、複合動詞前項と接頭辞の扱いも問題点の一つである。

第二章 動詞連用形+動詞型複合動詞の構造と分類

複合動詞の分類は現代語を中心に様々な形で行われており、代表的なものに寺村（1969）、山本（1984）、影山（1993）（2014）などがある。古典語では関（1977）が「補助関係」「修飾関係」「一致関係」の3種を基本とし、自他と併せて分類した。山王丸（1994）（1996）は意味重点と格関係から中古の複合動詞を分類している。

筆者はこれらを踏まえ、意味重点と形式化の2点を基準として「動詞連用形+動詞」を「前項名詞化」「時間的継起」「並立」「疊語」「同時進行」「対義語」「類義語」「修飾関係」「接頭辞的前項」「補助動詞の後項」「転義」の11に分類した。また、この中で「複合動詞」として認められるものの範囲を「対義語」「類義語」「修飾関係」「接頭辞的前項」「補助動詞の後項」「転義」とした。

第三章 古代語複合動詞の概要と変遷

収集した「動詞連用形+動詞」は異なり語で、万葉：1102、記紀：113、宣命・180、竹取：184、伊勢・：185、土左：77、古今：321、後撰：382、拾遺：328、源氏：4106で、そのうち複合動詞としたものは、宣命以外では9割前後であった。宣命は他資料に比べて時間的継起と並立の割合が多いが、それは表現の目的と文体によると思われる。

分類で数量的にもっとも大きな割合を占めるものは修飾関係の複合動詞で、『万葉集』では61%、『源氏物語』では58%である。接頭辞的前項動詞、補助動詞的後項動詞の存在は上代から確認でき、接頭辞的前項動詞に関しては、「あり～」の扱いをはじめとしていくつか疑問点は残るものの、「うち」「ひき」等、その後使われる接頭辞的前項動詞のほぼすべてについて、上代における形式化が確認できた。補助動詞的用法の後項動詞は時代を下るにつれて増加している。さらに、転義した語、つまり前項と後項が一体となって新たな概念を表す例も徐々に増加している。これらは、古代における動詞の複合を示すものと考えられるが、一方で、前項・後項の順序、助詞の介入の問題から、従来の指摘通り、古代語複合動詞では前項と後項の結合の緊密度が低いことも再確認した。

第四章 修飾関係の複合動詞

古代語複合動詞において最も大きな割合を占めるのは、前項と後項が修飾関係にあるものであるが、修飾関係の複合動詞には、後項が前項の結果であるもの＝前項が後項の原因・理由、手段・方法を表すもの、前項が後項の様態や状況を表すもの、前項が後項の思考・発言の具体的内容であるもの、後項が前項に対して、様態、動作の方向を付加するものの4種がある。前項が思考・発言の具体的内容を示すものは現代語には見られないが、それ以外は現代語に通じるものである。

また、現代語には「泣き腫らす」「だまし取る」のように前項と後項の目的語が一致しない複合動詞があるが、このような例は古代語にも見られた。「吹き上ぐ」「泣き濡らす」「踏み立つ」「着込む」等である。これらは目的語と後項の間に目的語とは無関係の前項が入っているもので、前項と後項が単なる複数の動詞の羅列ではないことの根拠としてよいだろう。

修飾関係の複合動詞、接頭辞的前項、補助動詞的後項、転義した語は現代語複合動詞と同じ形態と意味関係によるものであり、古代語における「動詞連用形+動詞」の多くは、未成熟ではあっても「複合動詞」と呼ぶことができる。

第五章 補助動詞的用法の後項動詞

実質的な意味を失って補助動詞的に使われる後項動詞は時代と共に増加している。補助動詞的用法と考えられる後項動詞は、本研究の分類では、上代では25語、平安時代の『源氏物語』まででは57語であった。上代と平安では総語彙数がまったく違うことを考慮に入れる必要があるが、それでも、上代には表現されることのなかった概念が平安時代には後項動詞によって表されるようになったといえる。第五章では、これら補助動詞的後項動詞の形式化の過程をたどり、意味・用法を記述した。

古代語における補助動詞的用法の複合動詞は次の通りである。

・可能（不可能）・困難＝あふ（下二段）う かつ かぬ しる

- ・程度・強調＝あまる いる（一部は変化＝開始）こむ（下二段） しらふ すぐ
すぐす そす そふ（下二段） たつ（下二段） つくす つむ（下二段）
まさる ます まどふ わたる
- ・方向＝あふ かかる かく（下二段） かはす かふ（下二段） しろふ
- ・意図・心情・態度＝つく（下二段） なほす なる ならふ ならはす
- ・アスペクト＝第六章で述べる。

第六章 後項動詞の補助動詞的用法 ～アスペクトに関わる補助動詞の後項動詞

補助動詞の用法と考えられる後項動詞の中で特に大きな位置を占め、また上代から平安にかけて著しい変化が見られたのはアスペクトに関わるものである。アスペクトに関わる補助動詞の後項動詞は次の通りである。本章ではこれらの後項動詞の形式化の過程を明らかにするとともに、「つづく」と「わたる」、「そむ」と「はじむ」等の類義関係の後項動詞と結果の残存を表す「おく」の意味・用法について論じた。

- ・開始・・・・そむ、はじむ、かかる（いる、いづ＝転換・変化）
- ・継続・・・・つづく、わたる、をり、おはさうず、おはします、おはす、く、ゆく
- ・反復・・・・ありく、かへらふ、かへる
- ・中断・・・・さす、
- ・終了・完了・・・・はつ、をはる、をふ、やる
- ・結果の残存・・・・おく

アスペクトに関わる後項動詞自体が増加するとともに、後項動詞によって表される内容も複雑化している。たとえば、「かかる」「さす」「やる」のような途上、中断の表現は平安に入って見られるようになったものであり、また、完了や反復から程度の表現への展開も見られる。動作・変化の局面をより詳細かつ具体的に描写するようになってきたことが、後項動詞の変化から見てとれる。このような後項動詞の発展の背景の一つには物語というジャンルが考えられる。

終章 まとめと今後の課題

古代の和語資料から収集した「動詞連用形＋動詞」の9割ほどは、形態的にも、前項と後項の意味関係においても、現代語で「複合動詞」とされるものと非常に近い。一方で、結合の緩さ等、質的に現代語と同じであったとは言えない。これらを総合して、筆者は古代語に「複合動詞」の存在を認め、その後の変化・発展を「複合動詞としての変化」と考えてよいのではないかと考える。

今後は本研究で収集した語について検討を続け、さらに時代を下って複合動詞の変化を追うと共に、古代語についてもあらためて考えてゆきたい。